

平成 29 年度 学校評価報告書（目標設定・実施結果）

視点	4年間の目標 (平成28年度策定)	1年間の目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価 (3月8日実施)	総合評価(3月29日実施)	
			具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等
1 教育課程 学習指導	<p>①生徒の確かな学力の定着と学習意欲の向上につながる組織的な授業改善に取り組む。</p> <p>②国際教育を推進し、多様な価値観を受容する力を育む。</p> <p>③生徒会活動・学校行事等の活性化に取り組む、自己有用感やリーダーシップを育む。</p>	<p>①基礎学力診断テストの結果を有効活用する。</p> <p>①アクティブラーニングのロードマップを作成し、更にその手法を深化させる。</p> <p>②1年総合の国際講演会及び交流会をアクティブな学びにする。</p> <p>③生徒会本部役員と各委員会との連携により、行事や委員会活動の活性化を図る。</p>	<p>①基礎力診断テストの結果分析報告会を職員対象で開催する。</p> <p>①アクティブラーニングのロードマップを作成し、その一手法である、各授業内での確認テストの実施を推進する。</p> <p>②1年総合の国際講演会を1講師によるスタティックな講演から各クラスに1人を配し、生徒とのやり取りを取り入れたよりアクティブな講義にシフトする。</p> <p>③生徒会本部役員と各委員会委員長との意見交換の場、また生徒と教職員との意見交換の場を設ける。</p>	<p>①基礎力診断テストの結果を保護者面談で活かしたか。生徒の自己理解を深める資料として活用できたか。</p> <p>①アクティブラーニングのロードマップを作成できたか。単位授業内での確認テスト実施を普及させたか。</p> <p>②1年総合の国際講演会を講師と生徒のアクティブな講座形式にすることができたか。</p> <p>③生徒の意見を聞く機会を持つことができたか。生徒からの発案があったか。</p>	<p>①カリキュラム開発Gの担当者と有志教員が報告会に出席し、話し合われたことを学年会で伝達する形で実施した。</p> <p>①主体的、対話的で深い学びに通ずる学習評価に係る研修を実施した。単位授業内での確認テスト実施の普及計画を変更した。</p> <p>②1年総合の国際講演会を講師と生徒の対話が多い講演会にすることができた。</p> <p>③生徒からの発案を実現できたものは少ないが、生徒からの発案があった。</p>	<p>①報告会の実施形式を学年別の形で実施し、業者担当者と学年団の間で意見交換ができれば、生徒理解がより深まると考える。</p> <p>①ルーブリックに基づく授業計画の構築を目指す。ルーブリック表を生徒に示すことで、生徒が自分の思考や行動を客観化し、自身の認識様式全体を把握できる力を高め、学力向上につなげる。</p> <p>②1年総合の国際講演会をより深い国際理解教育につなげる。</p> <p>③会議の定例化を進め、意見交換を活発化する。</p>	<p>①学力向上を図る様々な取り組みは一定の評価ができる。新カリキュラムの狙いを職員全体が共有しているかが重要である。またその方向性においてアクティブラーニングや高大接続の波の中で学力向上を推進していくべきだ。</p> <p>①生徒による授業評価を科目と全体だけでなく、それぞれ学年別に明示すべきだ。</p>	<p>①新カリキュラムには一定の評価をする。新カリキュラムから学力の伸長に軸足を置いてゆくことを職員全体の共通認識として定着させるよう取り組むこと。</p> <p>①対話的で深い学びに通ずる学習評価に基づいたロードマップを作成すること。</p> <p>①生徒による授業評価のフィードバックの方法を工夫すること。</p>	<p>①新カリキュラムから学力の伸長に軸足を置いてゆくことを職員全体の共通認識として定着させるよう取り組むこと。</p> <p>①対話的で深い学びに通ずる学習評価に基づいたロードマップを作成すること。</p> <p>①生徒による授業評価のフィードバックの方法を工夫すること。</p>
2 生徒指導・支援	<p>①生徒とのコミュニケーションの充実を図り、きめ細かく粘り強い生活指導・生徒支援を組織的に行う。</p> <p>②部活動の活性化に取り組み、責任感や自己肯定感を育む。</p>	<p>①生徒一人ひとりの理解を深め、各学年の生活指導体制について連絡調整を図り、学年とグループが協働して組織的な指導・支援を行う。</p> <p>②部活動に係る活動環境を整備し、部活動への定着率をあげ、加入50%以上を目指す。</p>	<p>①問題行動等の予防のための講演会や啓発活動を適切に行い、各生徒が安全安心に学校生活が送れるように努める。学年間の生活指導について連絡調整を図って組織的な取り組みを実施し、必要に応じて外部機関を有効に活用する。</p> <p>②かわしまホームへの訪問活動など、発表の場を増やし活動を奨励する。</p> <p>②生徒と関わる時間を増やす。</p>	<p>①講演会や啓発活動により、問題行動を予防できたか。学年間での連絡調整を密にし、組織的な生活指導を実施できたか。特別な支援が必要な生徒に対し、外部機関を含めた教育相談体制のもと課題が解決できたか。</p> <p>②発表の機会が増えたか。加入率50%以上を達成できたか。</p>	<p>①携帯電話、SNS、喫煙防止教室などを行い、問題行動の予防に努めることができた。</p> <p>また、きめ細かく生活指導を組織的に取り組み、必要に応じてスクールカウンセラーや児童相談所や警察などと連携して問題解決に努めた。</p> <p>②地域のボランティア活動や、防災訓練へ参加した。部活動加入率は36.1%で目標には届かなかった。</p>	<p>①更なる問題行動等の予防に向けて、普段の学校生活の中で教職員間での情報共有を密に行い、共通認識のもと組織的な指導・支援を行う。</p> <p>問題の事案に応じて警察や外部の支援機関の適切な連携を検討していく。</p> <p>②新入生に対して、部活動見学期間をもつ。部活動の試合結果など活動をPRする。</p>	<p>①問題行動の件数が昨年度比で半減しているのは予防の取り組みが功を奏したと評価できる。しかし、学年により発生件数が大きく異なる点は検証と対策が望まれる。</p> <p>②地域との交流は各分野で促進されていることが伺われる。しかし、地域に出るだけでなく、生徒を地域の行事等に協力し易い体制を作ることが望まれる。</p>	<p>①問題行動の件数の減少は一定の評価をする。しかし、学年による発生件数の差異を検証し、対策に努めることが望まれる。</p> <p>②部活動加入率の達成目標を実現可能な目標とすること。また、実効性のある方策の実施が必要である。</p> <p>②地域との交流が推進されていることを評価する。</p>	<p>①日常的な啓発方法と各講演会等を相乗的に利用し問題行動の抑止に取り組むことが望まれる。</p> <p>②部活動加入率向上のための実効性のある方策を実行する。</p> <p>②地域との交流が推進されていることを評価する。</p>

	視点	4年間の目標 (平成28年度策定)	1年間の目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価 (3月8日実施)	総合評価(3月29日実施)	
				具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等
3	進路指導・支援	①多様な進路希望の生徒に細かく対応するため、3年間の系統的な進路支援体制を充実させる。	①進路行事の充実を図り、進路への関心・意欲を高めつつ、進路実現のための学習意欲の向上を図る。	①在校生向けに卒業生による講話を行う。 ①進路決定時期から逆算し、進路実現に至るロードマップを明示する。 ①家庭学習の重要性を認識させ自己の振り返りに資するため、家庭学習時間調査シートを作成する。	①の結果から進路選択に向けた意識が高くなったか。 ①進路実現に至るロードマップを作成できたか。 ①家庭学習の習慣が身に付いた生徒が増加したか。	①卒業生による講話は行うことができなかったが、各種ガイダンスを実施し、生徒の進路への意識を高めることができた。 ①1年生において定期テストごとに学習計画表を作成、テスト後に提出させたことで家庭学習の習慣化の成果が見られた。	①3年間を見通したキャリア教育の計画を再検討するとともに、新1年生から「総合的な学習の時間」も活用して進路指導の充実を図る。 ①日常の学習がまだ十分に習慣化されていないので、さらに家庭学習時間調査シートを活用して家庭学習の習慣化を図る。	①キャリア教育の計画を再検討・再構築できたことは評価できる。 ①新たな学習教材業者は家庭学習の習慣化の促進を狙ったものであるとの由だが、日々の授業の家庭での予習・復習が重要ではないか。 ①卒業生による生徒への講話は実現させよ。 ①本校は進路多様校であり進路指導は容易ではないと察するが、進学希望者に対し学力の定点観測や細やかな指導及び励ましを願いたい。 ①進路の情報が家庭まで届かない。説明会を開催して欲しい。	①キャリア教育の再検討と再構築を評価する。 ①新たな学習教材業者の導入が実質的效果を上げるよう有効な活用策を検討することが望まれる。 ①卒業生による生徒への講話が実現できなかったことが課題として残る。	①新たな学習教材業者の導入が実質的效果を上げるよう有効な活用策を検討すること。 ①卒業生による生徒への講話を実現できるよう取り組むこと。 ①保護者・生徒に対する進路情報の発信の仕方を再検討する。
4	地域等との協働	①地域に開かれた学校、地域から信頼される学校をめざし、地域との連携・交流を推進する。	①地域・学校の連携をよりアクティブにそして恒常性をもったものとする。	①地域及びPTAを含む学校との連携の頻度を高めるため、スポーツ的行事や文化的行事において相互の協働を着実に増加させる。	①地域及びPTAを含む学校との連携の頻度を高めることができたか。	①地域及びPTAを含む学校との連携をよりアクティブなものとすることができ、より恒常的な事業とすることができ見通しが立った。	①アクティブ化した地域及びPTAを含む学校との連携を、より恒常的な事業として維持する	①PTAを中心とした地域連携の取り組みは高く評価できる。しかし、地域を活用するだけではなく地域に打って出る体制作りの必要性を感じる。地域・学校の相互補完的な活動なくして恒常的な取り組みはあり得ない。	①PTAを中心とした地域連携の取り組みは評価できる。地域・学校の相互補完的な活動の推進に向けての体制作りが望まれる	①地域・学校の相互補完的な活動の推進に向けての体制作りに取り組むこと。
5	学校管理 学校運営	①生徒が安全で安心して生活することができる教育環境の管理に努める。 ②生徒と向き合う時間を確保するため、一層の組織的な学校運営と校務の効率化を図る。 ③事故・不祥事の防止を徹底する。	①DIG学習会の実施にあたって、生徒も参加対象とした。 ②ポータルサイトの利用をより促進し、学年やグループでの利用を進める。	①DIG学習会の実施にあたって、生徒も参加対象とし、通学路のハザードマップを作成する。 ②ポータルサイトの利用率を上げるため、企画会議で学年・グループでの利用をお願いし、施設・備品の予約をポータルで行うようにする。また、必要な場合は研修会を開催する。	①DIG学習会を実施できたか。通学路の危険地帯を認識できたか。 ②朝の打ち合わせで、職員室中央黒板の使用を減らし、朝の打ち合わせが短くできたか。	①地学基礎の授業で生徒対象のDIG学習会を実施した。通学路の危険地帯を認識できた。 ②朝の打合せでポータルサイトの利用は増えてきた。時間短縮はできている。	①地学基礎は3年生の科目であるので、1年や2年のうちにDIG研修を実施できるかを考える必要がある。 ②ポータルサイトに掲載しながら、朝の打合せで話をするがあるので、しなくて済むと統一認識ができるとさらに時間短縮ができる。	①生徒対象のDIG学習会を授業の時間において実施できたことを評価する。更に恒常的な取り組みの体制を目指すべきだ。	①生徒対象のDIG学習会の授業時間内での実施を評価する。	①生徒対象のDIG学習会の授業時間内での実施を全学年で取り組めるよう計画する。